

2019.12.22 第4主日待降節Ⅳクリスマス礼拝

ルカ 2:13, 14 「天の軍勢の賛歌—栄光が神に、平和が地に」

聖書

13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。

14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

はじめに

本日は待降節第四主日に当たるのですが、クリスマスの喜びを重ねてクリスマス礼拝としてささげます。今年の待降節はマリア、ザカリヤ、シメオンのそれぞれの賛歌に心を向けました。今日は救い主がお生まれになったとき、天にて御使いたちが賛美した天軍賛歌に思いを向けて、その賛歌に私たちの心も合わせましょう。

1. 天と地に満ちる栄光

今日の説教後の賛美は「あら野のはてに」（福 87）です。その折り返しに「グローリア・イン・エクセルシス・デオ」（Gloria in excelsis Deo）」ということばが出てきます。これは14節の「いと高き所で、栄光が神に」のラテン語で、神さまへの賛美を表しています。羊飼いたちが夜番で野宿をしているときに、主の栄光が羊飼いたちを照らし、救い主キリストの誕生を知らせます。そして突然天に御使いたちと共におびたしい数の軍勢が現れて、神さまを賛美したのです。2,000年前に遡って、野宿をしている羊飼いの身になってこの光景を思い巡らしてみましましょう。きっと恐れと感動の入り混じった得も言われぬ体験だったことでしょう。その羊飼いの体験を私たちは今ここで味わうことが許されています。この礼拝の上に、「グローリア・イン・エクセルシス・デオ」という賛美が鳴り響いていることを覚えて、一緒に神さまの栄光をほめたたえましょう。

天の軍勢の賛美は2つの内容で構成されています。「いと高き所で、栄光が神にあるように。」「地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」天での神さまの栄光と地での平和が謳われています。この二つは詩篇などによく見られる並行法（パラレリズム）で書かれており、最初の文を別のことばに置き換えて次の文で表すという修辞法がとられています。ですから、「天」と「地」という対極にあることばですが、別々のことを指しているのではなく同じことを表していると理解できます。そうした理解に立って、この賛歌を見ると、天と地が一体化した壮大な広がりが見えてきます。キリストの誕生はまさしく「天」と「地」を一つにするものだったのです。

2. 天における神の栄光

「いと高き所で、栄光が神にあるように。」という天での神さまの栄光について見てみましょう。ここで分かりにくいのが「栄光」ということばです。栄光は英語ではグローリー（glory）、ギリシャ語ではドクサと言いますが、これはヘブル語のカーボードということばのギリシャ語訳で、カーボードの本来の意味は「重い」ということです。「栄光」と「重い」、何となくつながりませんか。すなわち、栄光とは永遠の重みのある事柄であり、重みのある神さまの世界を表しているのです。その永遠の重みである神さまの御心がキリストを通してこの世に現わされ、今や私たちはキリストに触れることで神さまの永遠の重みに触れることができるのです。今年、ノーベル化学賞を受賞された吉野彰さんが帰国され成田空港で記者会見されたときの「これは本当に重い」と仰ったことばに通じると思います。メダルのも重さもさることながら、ノーベル賞受賞の重さを感じてのことばと受け止めました。

神さまにとって最も重いものは何だったのでしょうか。そのヒントとなる聖句がヨハネ 17:1にあると思います。イエスさまは「父よ、時が来ました。子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。」と祈られました。これは、「父なる神さまが持つておられた永遠の重さであるご計画を、子であるわたしを通して現わしてください」という意味で、その重さとは十字架の重さです。それは、父なる神さまが愛するひとり子イエス・キリストに

十字架を負わせる重さであり、父の御心を背負って十字架にかかるキリストの重さなのです。今まさにその時が来ようとしている時に「栄光を現してください」と祈られたのです。

私たちがイエスさまによって神さまの御救いに与るということは、この永遠の重さをいただくことであり、天の栄光に与ることなのです。それゆえに、一人の人がイエスさまによって救われることは、何と重く栄光に富んだことなのでしょう。救いの恵みが注がれるたびに、「天の栄光」が舞い降りるのです。いつも天の栄光に包まれた祝福の中に教会が歩めるように祈り、求めましょう。「一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがあるのです。」(ルカ 15:7, 10)。

3. 地の上に現された栄光

神さまの永遠の重さが御子キリストによって地上にもたらされる時「平和」が実現するのです。平和はギリシャ語では「エイレーネ」と言いますが、これはヘブル語の「シャローム」の訳です。なので「シャローム」は神さまの栄光が地上に実現したときの状態で、神さまの永遠の重さの地上的表現なのです。それゆえに、平和があるところには神さまも共におられると言えるのです。

イエスさまのことをイザヤ 9:6 に預言されているように、「平和の君」と呼びます。パウロもエペソ 2:14 で「実に、キリストこそ私たちの平和です」と語りました。キリストこそ地に平和をもたらしてくださる方で、この方を退けていることが破壊と混乱を招いている一番の原因です。一人の人がイエスさまを信じて神さまの御救いに与ることが平和の出発点です。出発点に立たずに走り出そうとするので、どれだけ平和を求めても実現しないのです。本当に平和を求めたいと願うなら、イエスさまを救い主として信じる信仰に立ち、そこから出発することです。この方は「平和の君」ですから、信じる者に必ず平和を与えてくださいます。

イエスさまが与えてくださる平和には一つの特徴があります。それは平和を妨げている「隔ての壁」を打ち破り、二つのものが一つになるということ

です。私たちの周りにはたくさんの壁があります。最大の壁は神さまと人の間にある罪の壁です。罪の壁があることによって、夫婦や親子に代表される人間関係の壁が生まれ、国家や言語による民族の壁が生まれ、自然との調和が保てなくなる環境の壁が生じていると理解しています。この壁を打ち壊すためにキリストは地上に誕生してくださったのです。「キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」(エペソ 2:14-16)

このクリスマス礼拝を通して、地上に和解の重みもたらされることを祈ります。分断、亀裂、破壊によって隔てられてしまった関係を修復し、真の平和を地にもたらすことができますように。イエスさまの誕生を迎える人々、すなわち「みこころにかなう人々」によって平和が実現しますようにお祈りします。

結び

神さまの永遠の重みである御救いがキリストによって世に証されました。それを受け入れる人々によって地に平和がもたらされました。どうぞ、私たちを平和の道具としてお用ください。

アッシジの聖フランチェスコ「平和の祈り」より。

「ああ主よ、わたしをあなたの平和の道具にしてください。

憎しみのあるところに、愛をもたらすことができますように。

争いのあるところにゆるしを、

分裂のあるところに一致を、

疑いのあるところに信仰を、

誤りのあるところに真理を、

絶望のあるところに希望を、

悲しみのあるところに喜びを、

闇のあるところに光をもたらすことができますように。

ああ主よ、わたしに、

慰められるよりも、慰めることを、

理解されるよりも、理解することを、

愛されるよりも、愛することを求めさせてください。

わたしたちは与えるので受け、

ゆるすのでゆるされ、

自分自身を捨てることによって、永遠の命に生きるからです。

アーメン」

「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」この祈りを心から祈ります。